

## 『デジタル・エコノミー 2004』

米国商務省／室田泰弘編訳 東洋経済新報社 定価 2,100円

アメリカのIT経済動向を克明に描いた報告書である。一九九九年に第一回がウェブ上で発刊され、今回が五回目ということになる。

これまで、この一連の報告書は、きわめて斬新かつ平易な切り口でIT先進国アメリカの真実の姿を明らかにしてきた。今回も従来同様に、米国商務省リポートが第一部、編訳者による解説が第二部という構成が踏襲される。

デジタル・エコノミーの到来がまだ疑問視されていた九〇年代半ば過ぎに、米国連邦準備理事会のグリーンズパン議長は議会演説で、「われわれは一〇〇年か二〇〇年に一度の技術革新に遭っているのかもしれない」と述べた。彼の洞察の正しさは、その後発刊される商務省の調査報告でも次々に証明されてきた。むろん最新版においても基本姿勢



そのものを根本的に転換させうる巨大な技術革新との認識がいたるところに垣間見られる。

ITは「バブル」だつたとの認識は今も日本では根強く持たれている。だが、米国商務省報告ではこの見方は一貫して否定されてきた。確かに二〇〇〇年以来、新興市場でIT企業が高株価を記録し、その後大幅な縮小を見たのは記憶に新しい。

しかし、これを単なる一過性のブームと考えるのは誤りである。根源的な新技术出現の際に、過剰なまでの期待感が立ち現れるのは自然の流れであり、一八世紀の蒸気機関発明後に出現した鉄道バブルなどにも見られる必然的現象であつた。一方、本報告書の記述は、ITを

巨大な技術波及の過程における体制変換と見る、きわめて歴史的事実、二〇〇三年のアメリカ経済に占めるITの寄与率は三〇%弱まで回復しつつある。だが、それと同様に重要なのはITによって、他の応用領域の技術革新も同時進化しつつある現実である。生命情報科学がその典型である。

近年はバイオやナノといった新技术にとって情報技術は不可欠の存在となつていて、また燃料電池等の新エネルギーに関しても同様である。これらから、多くの先進企業が誕生しつつあり、公的部門との連携によって影響力は増大しつつある。

バイオ等は派生領域のほんの一端に過ぎない。専門家の知見によれば、新技术が市場的な価値に転換されるまでは長い時間要する。その時間は数十年から一〇〇年程度に及ぶ。ゆえに科学技術と社会との相互連関とは、本来的に定量化に馴染む性質のものではない。本報告書の方法論とは、現状の動きを忠実に素描し、データを補強材料として用いることで、いつそう

の説得性を有している。同様に、第二部の編訳者解説も太変示唆に富むものである。現状の日本経済に対する辛口の論評として読むことができる。いわばITを分散型ネットワークの代名詞のようなものとすれば、日本の産業構造をその対極なし抵抗勢力と考える。すなわち本来なら市場競争から退出すべき企業が生き残っている点を問題とする。

その際編訳者の指摘はきわめて具体的かつ有用なものである。たとえば、ライアンエアやLNMといった新企業の事例紹介は興味深い。これらはまだ日本では高い知名度を有していない企業であるが、時代状況を的確に読んだビジネス・モデルで市場を席巻する。ITが巨大な「体制転換」をともなうとの実感を強めさせるのにふさわしい企業分析である。

報告と解説とで非常にバランスのとれた構成となつており、今後の日本のとるべき方向性を見定めるうえで、大きな示唆に富む一冊といえる。

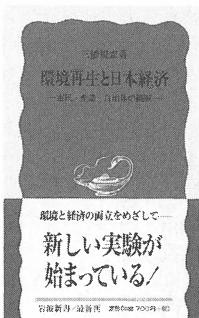
社会生態学研究者  
森里陽一

書評

## 『環境再生と日本経済』

三橋規宏著 岩波新書 定価735円

戦前から戦後にかけて名工コノミストと謳われた高橋亀吉は、経済変動を見るにあたり、一時の「変態」と構造的「変化」の相違に留意せよと説いた。前者は定量的かつ微分的な変容でありいざれ元に戻る性質のものである。一時の異常事態に過ぎない。一方、構造的変化は本質的に異なる。蝶のさなぎが殻を突き破つて成虫として羽ばたくように、まったく異質なものへと変貌してしまう。本書を読んでみて、まず心に浮かんだのが、このことであつた。



前者は定量的かつ微分的な変容でありいすれ元に戻る性質のものである。一時の異常事態に過ぎない。一方、構造的変化は本質的に異なる。蝶のさなぎが殻を突き破つて成虫として羽ばたくようには、まったく異質なものへと変貌してしまう。

本書を読んでみて、まず心に浮かんだのが、このことであつた。

あたりから高橋亀吉のいう「変化」の過程に入つたようである。本書の著者は十数年、ジャーナリストとして克明に変化のプロセスを追求し、変化を促進する革新に的確な解釈を試みてきた。その具体的な動向は、地方における取組みや企業内での活動に如実に表れる。いずれも、環境と協働を軸とした純然たる社会的イノベーションである。必ずしも、ハイテク技術を活用したものばかりではない。多くは社会システムのなかの価値観や意識の変化を巧みに捉えた素朴なアイディアの積み重ねである。地域にあつては、地域住民や観光客の意識変容、企業にとつては主たる顧客の価値観の変質である。これらが現状のささや

かな取組みの一つひとつに着実に反映される事実を本書は教えてくれる。

さらに、事例の紹介ばかりではなく、自ら新コンセプトをも紹介・提唱するのがこの著者の得意とするところである。バックヤースティング、グリーン化手順がそれにあたる。みな思わずはつとさせられるシンプルなアイディアばかりであり、環境が経済を見るにあたっての有力な視角の一つであることが理解される。

「国富」とは、これら地道な協働作業の長い積み重ねの結果として形成されるものだ。

本書の主張は、少し大袈裟にいえば、文明システムそのものの転換に関わる。巨大な価値意識の転換を問い、その動向を足元の活動から忠実に素描するものである。一本一本植えられる木を丹念に観察することで、いずれ大きな森として繁茂する未来ビジョンを思い描くものであ

だが、本書に現れる数々のコンセプトはきわめて長い時間を要するものばかりである。一時期な流行ではない。ほんの数年前までISOや環境会計といった手法や規格がずいぶんと人々の耳目を引いたものだつたが、本書はその種のブームのようなく環境を扱うものではない。

日本は産業によつて国際的優位を築いてきた。日本の産業システムは、地域に蓄積される多様な中小企業から都市の大企業までさまざまである。これらが一体となつて、環境配慮による

小さな取組みの数々から、日本経済という巨大なシステムに、環境や情報といった革新的な変数が織り込まれ、全体として相乘的な変容を遂げつつある現状を見ることができる。日本は過去の凄惨な公害の経験やそれら負の遺産をばねにして、今後、環境のトップリーダーたりうるだけの十分な資格を備えた国だと思う。環境と経済を両立させた新システムの重要性を国際社会にどの程度アピールできるかが今後の課題となるだろう。

新たな産業形態が芽生えつつあるようだ。本書のいう「グリー

社会生態學研究者  
森里陽

## 『企業とは何か』

P・F・ドラッカー／上田惇生 訳 ダイヤモンド社 定価2,520円

長らく改訳を待ちにした一冊である。かつては『会社という概念』の書名で東洋経済新報社から出版されたが、事実上絶版状態にあつた。マネジメント論の大家として知られるドラッカー若き日の著作（一九四六年）であり、「経済人の終わり」『産業人の未来』に続く二作目として発表された。特定企業（GM）の協力を得て執筆されたという意味では、唯一かつ異色の作品であるが、企業組織の事例研究としても今なお色褪せない輝きを放つ。

ドラッカーは本書に先立つ二作を「政治の書」として執筆した。いずれも、政治的視角から機能する社会の条件を探るものであった。特に『産業人の未来』では、戦後の企業システムを「産業社会」の中心的役割と捉え、企業組織のコミュニケーションを自由社会存続の重要な鍵と考えた。



彼は社会やコミュニティという大目標に向けた手段として、企業を研究することとなつた。すなわち、社会を有効に機能させる条件としての企業こそが彼にとっての中心課題たりえたといえる。同様にマネジメント概念の定立者としての地位を得た。最初のマネジメント文献としても本書はきわめて重要な位置を占める。

本書でなされる恐らく最も重要な問題提起とは、企業組織の持つ権力に関するものである。彼にとって企業とは単に経済的次元のみならず、政治的・社会的次元から把握されるべき存在でもあつた。経済活動を営むなかで、企業は従業員、地域社会、取引先等々の関係者に否応なく影響を与える。ある種の権力関係に巻き込むこととなる。ここで重要なのは権力の正統性のいか

んである。ドラッカーの答えは常に明快だ。企業とは「世のため人のため」に成果を挙げることで、その権力は正当化される。政治的・社会的視野からの企業の把握を彼は六〇年近くも前から構想していたことになる。

本書を通底する経営上の識見にも、多くの意義がある。いくつか紹介しておきたい。

第一は「組織とは手段であつて目的ではない」とする見方である。組織それ自体には明確な指揮命令系統が存在し、ゆえに権力関係を必然的にともなう。しかし、それはより高次元の社会的目的に仕えたときにはじめて正当なものとなる。

第二は「従業員は資産ないし資源であつて、コストではない」とする見方である。産業社会における市民性の付与という高次の目的に關わる重要な見解であり、後の知識社会の構想にも明確に引き継がれる。

第三は「唯一正しい組織設計なるものは存在しない」とするものである。これはGMの事業部制の評価にも関わる思想であるが、それ以上にアメリカ憲法

の連邦主義（権力の過度な集中を抑制するシステム）にその淵源が見出される。

企業は状況に働きかけると同時に、状況に作用される存在でもある。ゆえに、変化をも柔軟に組織設計に盛り込む必要性が指摘される。

ドラッカー自身も自負するよう、彼のマネジメント概念は日本でいち早く理解され、その意味では高度経済成長への大きな思想的貢献もなされた。自身日本を高く評価した思想家であり、その造詣の深さは並大抵ではない。日本の経済や産業事情のみならず、社会・文化等にも精通している。

しかし、彼のマネジメント概念をはじめとして、ドラッカーのいわんとするところを実によく理解した日本の大企業が、特に社会的責任に關して現在さまざまな問題を抱えるのはなぜだろうか。訳者あとがきでも指摘されるように、本書日本語版の再登場はきわめて深い暗合をはらむようにも思われてならない。

社会生態学研究者  
森里陽一

## 『まがたま模様の落書き』

ハンス・プリンクマン著／溝口広美訳 新風舎 定価1,890円

奇妙な題名の本だなと思つて数頁を繰つてみたら、不思議な吸引力にとまらなくなつた。達意な文章や独特的のユーモア感覚など、プリンクマン氏は大変な筆力の持ち主と見える。

また、日本語による訳文も美しい。読者の読みやすさのためにさりげない配慮が多くなされてい

る。オランダ人銀行員による来日から別離まで（一九五〇～七四年）の移ろいゆく思いを書きつづつた隨想である。ヨーロッパ人の視点から、日本がゆっくりと確実に新たな輪郭で描かれる。日本人にとって当たり前のことではない。

著者は博識で深い教養に富む。なかでも觀察眼の鋭さはさすがだ。日本人によく見られる特定のタイプや独特的民族特性が、さりげない日常風景のなかできちんと見抜か

思つて数頁を繰つてみた

れている。

来日直後、彼は人々の振る舞

に対するふつふつとしたぎること

となる。このアムビバレンントな

感情が全体を貫くテーマであ

る。

に魅了された。「人々の動きはまるできれいに編み込まれた縦糸と横糸のように整然としたもの」に感じ、日本への愛着の程度は高まりゆく。京都では蚊帳のなかで螢を放す風流を満喫し、谷崎潤一郎の作品を愛読する。日本を愛惜してやまず、妻も日本人から迎えた。

それは、単なる外国人からの浅薄な日本びいきとはまったく異なる。彼の日本への愛惜は、自らのアイデンティティに融合するまでに真実のものだつた。だが、逆にこれが曲者でもあつた。

彼自身がきわめて「日本の」であつたために、むしろ近親憎

のなかで螢を放す風流を満喫し、谷崎潤一郎の作品を愛読する。日本を愛惜してやまず、妻も日本人から迎えた。

ほのめかす存在だ。日本人は質問に答えたくないときや沈黙を守りたいときに、このまがたまのような形を無意識に紙に書くのだと著者は説明する（私は見たことはないが）。それは、捉えどころなく、そして不可解な「日本的なもの」の象徴である。著者自身が自らに「日本性」を認めるがために生じる二律背反による葛藤が、本書に不思議な文学性すらをも与える。

これまで、日本の戦後を外国人の目から見た著作は多かつた。ルース・ベネディクトの『菊と刀』はすでに古典としての地位を占めているし、最近ではジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』まで数多い。これらの

い。日本異質論が大々的に騒がれた時期もある。

本書も大きな枠組みではこの種の日本人論の範疇に入ると思

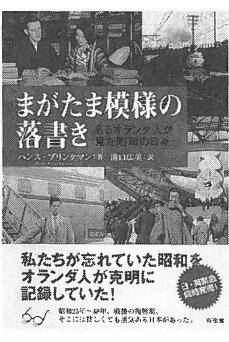
うのだが、方法やねらいはまつたく違う。ジャーナリズティックでも学問的でもなく、あくまでも、一人間の回想として実際に答えるのである。

まがたまは三種の神器の一つ

である。タイトルにある「まがたま」なる茫漠とした象徴物のゆえん

であり、日本の精神的ルーツをもここにある。まがたまは三種の神器の一つのような形を無意識に紙に書くのだと著者は説明する（私は見たことはないが）。それは、捉えどころなく、そして不可解な「日本的なもの」の象徴である。著者自身が自らに「日本性」を認めるがために生じる二律背反による葛藤が、本書に不思議な文学性すらをも与える。

これまで、日本の戦後を外国人の目から見た著作は多かつた。これまでも、日本を憎む二層の矛盾した過程を覚醒した意識でつづるものである。本書に一貫して流れるとりとめなさが、かえつて不思議な安心感を与えてくれる。まがたま模様が綾をなす。



これまでも、日本を憎む二層の矛盾した意識でつづるものである。本書に一貫して流れるとりとめなさが、かえつて不思議な安心感を与えてくれる。まがたま模様が綾をなす。

これらは、分析的に解釈するすべてがばらばらになつてしまふ硝子細工だ。ここに美しさがある。ちょうど『徒然草』や『方丈記』に見られるような、もうものへの寂寥とした情緒に満ちている。一風変わった隨想として楽しく読める作品だと思います。

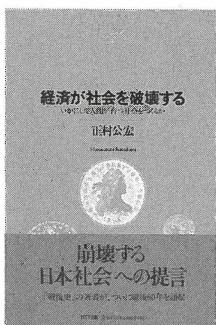
書評

## 『経済が社会を破壊する』

正村公宏著 NTT出版 定価1,680円

「経済学の教育・研究で心が満たされた」とはなかつた。

ある経済学者による職業人生の回顧はこう締めくくられていた。だいぶ前のことだが、この一文を忘ることができない。専門家と称される人々が自らの存立基盤に批判の目を向けることは稀である。ちょうど医者が医療制度批判に二の足を踏むのに似ている。自らの存在の否定につながるからだ。このことは経済学の世界でも同様である。だが、まったく反対の意味で本書は有名経済学者による経済（学）批判として大変深い示唆に富む。著者は個別の領域にとられた凡俗の経済学者ではない。高度な知的能力に加え、繊細かつ鋭敏なコモン・センスが光る。この種の本は世の中にそうたくさんあるものではない。



起である。『大転換』は一九世紀半ば以降の自由市場資本主義の生成を克明に描写した研究である。知る人ぞ知る名著であつて、ポラニーはこの一冊しか書物を残さなかつた。

『大転換』は私の知る限り、資本主義的経済と共同体的社會との相克を描いた歴史上初の書物である。すなわち、社會と経済というきわめて大きな枠組みの位置関係を大胆に捉えた著作であり、その文明史的動態の緻密な描写である。

本書の基礎的視座も、ポラニイー的な大胆さを持つ。もちろん「経済がすべてなのか?」といつた問題意識から表面的かつ安直に現状を嘆いてみせる批判の類はこれまで多くあつた。しかし、これらの多くに共通した皮相さというものがある。それは

脆弱な論理を情緒で補おうとする姿勢である。だが、ヒューマニズムは論理の代替物たりえないし、これほどあてにならないものもない。

真摯に現状に対抗しようとするならば、それにふさわしい強力なロジックが必要なことは論を待たない。批判対象たる近代経済学を歴史的・構造的に理解した上で会得されたビジョンでなくてはならない。本書の強みはここある。

解されなかつたからだ。ツールにばかり目が行つてしまつたからだ。実際の経済や社会を見ればわかるように、現実とは部分の総和が全体と等しくなる状況などむしろ例外である。近代経済学が得意とする方法、すなはち経済のみを他の因果関係から切り離して理解しようとする」と、肝心の経済までが見えなくなつてしまふことになる。

本書の主張をつきつめて考えれば、そもそも経済と社会といふ二項対立的な図式 자체が意味をなさない。両者は分離して考えられるほどに単純なものではないからだ。

ゆえに、きわめて正統的かつ  
健全な保守思想を基底に有する。ラディカルであればよしとする姿勢は本書から読みとることはできない。それ以上に、経済や社会をありのままに多元なものとして捉えようとする姿勢が強く窺える。たとえば次のような言葉が見える。

「ひとつの現象をひとつの要因で説明したいという誘惑は、慎重にしりぞけるのが賢明である。社会現象は、多くの要因の複合的・相乗的作用のもとで発生する」。

ものごとに唯一の解があるなどとするのは幻想である。近代

ものごとに唯一の解があるなどとするのは幻想である。近代経済学が科学としての妥当性・実効性を欠くのは、この点が理

に具体的な解を示すといは、「正しい問い」の立て方をする良書といえるだろう。

書評

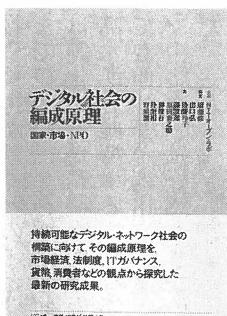
# 『デジタル社会の編成原理』

須藤修・出口弘 編著 NTT出版 定価3,780円

二〇〇〇年頃、情報技術に関する本が巷で実際に多く出ていた。当時 IT への期待は大変なもので、これなくして夜も明けないような騒ぎが続いた。現在その振り戻しか、あれは単なる「バブル」であつたと片づける向きも見られる。もちろん、IT への過大な期待感はアメリカでも見られた。しかし一方でアメリカでは、一九九七年から商務省によつて新技术の波及経路を探る研究が継続的になされていく。なかには産業革命との比較分析による稀有壮大な研究論文も含まれていた。

IT という新技术以上にその社会や政治への長期的なインパクトが探求されるのに対し、日本の場合、単なる一過性の現象と捉えられ、いつしか人々からも忘れ去られる。

この本は二〇〇三年に発行されたものだ。日本の専門家による当時の最先端の研究がまとめられ



大きな新技術が世の中に是認されるまでには時間がかかる。特に浸透過程で、世の中の価値観がついてくるまでにはゆうに数十年はかかる。その間はまだ名前すらないいきこちなさのなかで時間が過ぎていく。

少なくとも、確かなことがある。旧時代の思考枠組みが有効性を持たないことだ。技術と社会との相互浸透プロセスは本質的に予測不可能である。

また恐らくこうもいえる。ITは通常の頭脳で考えられる範囲を超越して進化するであろうことである。しかし、政府であれ、経済であれ、まだそれらは命名すらなされていない。

だからといって無意味なんか。そうではない。なぜなら「何を知らないのか」という事実を把握できるからだ。これだけでも本書の悪戦苦闘は無駄ではない。しかも、日本の研究動向は本書の水準からほどんど進歩していない。

産業革命時、交通網の発達で変化したのは人間の意識であつた。文明であつた。ワットが蒸気機関を発明した一七七六年は、アメリカ独立とともに、ダム・スマスが『国富論』を行した年でもある。近代が産声を上げた奇跡の年であつた。

しかし、われわれはまだ新技術にともなう文明転換の『国富論』を手にしてはいない。制度設計などいわばもがなである。本書の刊行時点ではすでに「バブル」は崩壊している。このタイミングも重要なと思う。なぜなら、一時の熱が一段落し、実際の社会への影響力が多少とも醒めた目で見られるようになったからだ。

逆に言えば、「バブル」の崩壊は技術的インフラの整備に不可欠のプロセスだった可能性もある。あたかも十八世紀の産業革命で起きた爆発的な鉄道バブルと同じ機能である。これによつてイギリス全土の鉄道敷設が結果として促された。

ITブームから数年経つた今、本書が教えてくれるもののは、現実の変化にふさわしい道具や制度の何ものをもわれわれは手にしていないという冷厳な事実である。

しかし、あらゆるものが陳腐化する変化のなかで、「知らぬとい」事実を率直に認めるほど強いことはないようにも思う。今後何を研究し発展させていくべきかについての足がかりを得るうえで本書の効用は高い。

森里陽一

## 『産業集積の経済地理学』

山本健児 著 法政大学出版局 定価2,835円

経済地理学における産業集積の理論を最近の動向まで幅広くカバーしつつ、手際よく紹介するものである。

産業集積を包括的に扱う経済地理学は、理論経済学的一大伽藍においてどちらかといふと日陰の存在だった。純粹経済論ほどに大学での講座数が多いわけでもなく、体系的な関連書も少ないのがその現れといえる。だが、不思議なことに、この分野は近年最も元気なもの一つである。

考えてみれば、経済的に筋道だつて説明しようとすると、産業集積とはまことに奇妙な現象といえる。現実に存在しているにもかかわらず、そのメカニズムを明瞭に説明しきるのは至難の業であった。

この分野が人を惹き付けてやまないのは独特的説得力にある。一国の発展形態から地方商店街の衰退まで、あらゆる経



活動のプロセス・モデルがそこにつまっているからだ。

また、経済現象に対する素朴な疑問たとえば「ある種の産業はなぜ特定の地域に集中する傾向があるのか?」「なぜ中小企業によるネットワーク形態が多いのか?」といった素朴かつまつとうな問い合わせに対し、一定の理解への手がかりを与えてくれる。

さらにいうならば、かなり実学に近いのもこの分野の特徴ではないだろうか。たとえば、地理をベースにしたマーケティング手法や貿易戦略などはたいていの企業なら取り入れている。人口構造などの他の情報と関連づけることで、相当程度のビジネス上の蓋然性と知見を得ることもできる。

この領域の現代的位相を理解するにあたり、本書では各言説

の独自性が時系列できちんと解説されている。つまり、道案内役として便利な本なのであり、教科書としての効用も高いものと思う。

一方、経済書として読んでみても、なかなか面白い。その理論的背景の多くは、制度経済学に負うものである。これらは単に市場のみでなく、組織、ネットワークといった多様な制度や主体から経済活動を見る。

シリコンバレーや第三のイタリア、日本では岡谷、坂城など実際に機能する産業地域は国内

外問わず数多くある。これらはいつた便利な言葉でなく、近代経済学では、「外部性」と

その実、分析の対象から除外された。このことからも、真っ向

かから経済学的に「不合理」な現象を扱う本書は正統な経済学の裏面史的様相をも呈している。

一元的で直接的な因果関係だけで現実に存在するものを捉え

きれるとは限らない。しばしば

論究される経路依存性や収穫遞

増などの比較的新しい経済原則は、単純な因果連鎖を越えて発

展しつつあるようにさえ見える。

本書で解説される経済理論の

「異端者」たちの言説は、むしろ目に映る産業集積という現実をあたかも自然を見るような目で捉えている。経済現象とは生命体であつて、部分に分解可能とはしない。

たとえば A・マーシャルは、

産業集積を森に喩えた。森には背の高い植物もあれば、低いものもある。茸もあれば、雑草もある。森は全体として機能する生命体なのであつて、一部だけを切り取って分析しても意味はない。社会科学の新たな可能性は案外このような視角にあるのではないか。

だが、一つ欲をいわせてもら

えば、日本の事例をもつと入れるとさらに価値が高まつたと思

う。このことで本書の理論が單なる理念型にとどまらず、高度な実証性を有するものとなりえ

たと思う。日本の産業地域にお

いて、その社会的ネットワーク

の生成やパフォーマンスは、世

界的にも優良モデルと考えられ

てきた。経済を論じる際には、

事実を政策にどう具体化するか

が重要と考えるためである。

社会生態学研究者  
森里陽一

# 書評

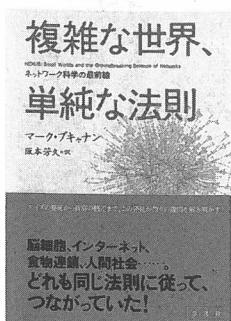
## 『複雑な世界、単純な法則』

マーク・ブキャナン／阪本芳久 訳 草思社 定価2,310円

よく「世の中狭いね」という。旅先で出会った人が、よく聞いてみたら同郷であつたり、共通の知人がいたりするなどは、決して珍しいこととはいえない。過去には單なる偶然とされていたものに、ネットワークの構造や形態からアプローチを試みるのが、「狭い世界（スマートワールド）」である。

近年、このようなネットワーク科学が注目されはじめている。最初に興味をもつてダンカン・ワットの「スマートワールド」（阪急コミュニケーションズ）を読んでみたのだが、こちらはかなりレベルが高く、歯が立たなかつた。そう思つていたところに出た本である。ジャーナリストならではのやさしい語り口で最後まで楽しく読むことができた。

ネットワーク分析の最前线と全体像を知るにはまさにぴつたりだ。どんな領域にもこの種の入門書は必要とみえる。「なぜ



という。旅先で出会つた人が、よく聞いてみたら同郷であつたり、共通の知人がいたりするなどは、決して珍しいこととはいえない。過去には單なる偶然とされていたものに、ネットワークの構造や形態からアプローチを試みるのが、「狭い世界（スマートワールド）」である。

コンサート会場で誰も指示しないのに拍手が一定のリズムを刻む。コオロギは同じタイミングで鳴く。考えてみれば、世の中はこんなことばかりだ。歴史も同じで、ちょうど明治維新のように、どこからともなく人が集まつて、体制を転覆させてしまうことがある。この種のメカニズムの究明に強みを發揮するのがネットワーク分析である。言葉の定義からいつても、ネットワーク構造が理解されるには、「つながり」それ自体を研究対象とせざるをえなくなる。つまり、一個の部品だけ取り出しても意味はない。全体の「つながり」としては、「つながり」としてどう機能するかを観察するしかない。そうなるのか」などの問い合わせはじめ、興味深い事例をたくさん用いて、説明されるのがありがたい。

コンサート会場で誰も指示しないのに拍手が一定のリズムを刻む。コオロギは同じタイミングで鳴く。考えてみれば、世の中はこんなことばかりだ。歴史も同じで、ちょうど明治維新のように、どこからともなく人が集まつて、体制を転覆させてしまうことがある。この種のメカニズムの究明に強みを發揮するのがネットワーク分析である。言葉の定義からいつても、ネットワーク構造が理解されるには、「つながり」それ自体を研究対象とせざるをえなくなる。つまり、一個の部品だけ取り出しても意味はない。全体の「つながり」としては、「つながり」としてどう機能するかを観察するしかない。そうなるのか」などの問い合わせはじめ、興味深い事例をたくさん用いて、説明されるのがありがたい。

コンサート会場で誰も指示しないのに拍手が一定のリズムを刻む。コオロギは同じタイミングで鳴く。考えてみれば、世の中はこんなことばかりだ。歴史も同じで、ちょうど明治維新のように、どこからともなく人が集まつて、体制を転覆させてしまうことがある。この種のメカニズムの究明に強みを發揮するのがネットワーク分析である。言葉の定義からいつても、ネットワーク構造が理解されるには、「つながり」それ自体を研究対象とせざるをえなくなる。つまり、一個の部品だけ取り出しても意味はない。全体の「つながり」としては、「つながり」としてどう機能するかを観察するしかない。そうなるのか」などの問い合わせはじめ、興味深い事例をたくさん用いて、説明されるのがありがたい。

コンサート会場で誰も指示しないのに拍手が一定のリズムを刻む。コオロギは同じタイミングで鳴く。考えてみれば、世の中はこんなことばかりだ。歴史も同じで、ちょうど明治維新のように、どこからともなく人が集まつて、体制を転覆させてしまうことがある。この種のメカニズムの究明に強みを發揮するのがネットワーク分析である。言葉の定義からいつても、ネットワーク構造が理解されるには、「つながり」それ自体を研究対象とせざるをえなくなる。つまり、一個の部品だけ取り出しても意味はない。全体の「つながり」としては、「つながり」としてどう機能するかを観察するしかない。そうなるのか」などの問い合わせはじめ、興味深い事例をたくさん用いて、説明されるのがありがたい。

しかし、ネットワーク構造の分析によって、まったく異なる光が投げかけられる可能性が出た。完全にランダムでもなければ、統制でもない、「イズム」とは無縁の中間的立場に相当するといえるのかもしれない。

ここでは、歴史が決定的に重視される。しかし、ネットワークの形成は川の流れに似ている。ほんのちょっととした作為で進路が変わるものではない。むしろ、反証の結果を予兆させるものがある。学者が、「歴史における小指の働き」といったことがある。どんなに押しても開くことがなかつた扉。しかし、機が合えばたつた一人の小指でも扉は開いてしまう。世の革命や戦争、恐慌などが代表例といえるであろう。

しかし、「なぜ」総合的な知的領域として、これからが楽しみである。社会生態学研究者

森里陽一

## 『知識の社会史』

ピーター・パーク／井山弘幸・城戸淳 訳 新曜社 定価 3,570円

知識と社会の相互関係を通史的に記述する快著である。著者はイギリスの著名な歴史家である。中世にはじまる知識の体系化の歴史を丹念に追いつつ、社会科学的アプローチを縦横無尽に駆使して、知識概念の変容や位置関係を把握しようとする。

知識とは、そもそも何を指すのか。史的な解明作業によって、知識の持つ社会的位置付けや機能のみならず、その権力構造、経済構造までもが、見事に明らかになつていく。

本書の持ち味は大きく三つあると思う。

一つは比較歴史学的手法により、知識と社会の相互作用を構造化する試みである。

中世の西洋において、伝統的に知識とは形而上に属するものであつた。实用性や実践性と無縁であるがゆえに、正統性が維持されてきた。限られた特権階級に独占された知識は、大衆とは無関係

に存在するのが普通のことであつた。

繊細な心配りがなされる。

一例として、中東地域との比較がある。周知のように、イスラム圏では歴史的に高い文明が

「普遍的」知の組織化を図ることで、中世の政治権力は中枢的な機能を維持することができた。

だが、このよだな構造を根底から覆す出来事が十五世紀に起つた。印刷技術の出現である。印刷技術以前と以降の知識社会の変容は本書の中心命題とすらいえるであろう。

たとえば、教權の独占物であつた聖書は徐々に大衆に開放されていく。宗教改革を通じた意識の変革によって、国民国家や資本主義といった近代精神の出現を見る。意識産業たる出版が中世の終焉をもたらした問題状況が実に的確に素描されている。

二つの特徴は、知識の体系化と西洋文明との地理的な相関関係の分析にあり、この点にも三つあると思う。

一つは比較歴史学的手法により、知識と社会の相互作用を構造化する試みである。

中世の西洋において、伝統的に知識とは形而上に属するものであつた。实用性や実践性と無縁であるがゆえに、正統性が維持されてきた。限られた特権階級に独占された知識は、大衆とは無関係



知識の社会史

十世紀に入り、もつとも巨大化した組織が政府、そして企業であつたことにもよく表れている。すでに四〇年前に世界は知識社会への移行を開始したといわれる。新たな社会の主役は知識と技術を生産手段として活用し得る、個人としての知識労働者である。巨大組織に独占されたアジアはさらに停滞した状態にあつた。しかし、そのようななかにあって、ほぼ唯一の例外として日本がある。本書では、生折に触れて日本文化の独自性が効果的に強調される。当時の文献を使い、情報拠点であつた長崎出島等を分析することによって、極東の島国が西洋文明を受け入れ、さらには西洋に文化を輸出する状況が描かれる。日本が近代以降、すぐれた経済発展モデルを描き得た素地も新知識受容への姿勢にあつたというわけだ。

三つ目は、「知識」という語を持つ本来的な意味内容に深い示唆を与える点にある。近代以降、次第に官僚制が知識権力の源泉となる一方で、知識を実学として捉えるもう一つの流れが形成されていく。このことは二

十世紀に入り、もつとも巨大化した組織が政府、そして企業であつたことにもよく表れている。すでに四〇年前に世界は知識社会への移行を開始したといわれる。新たな社会の主役は知識と技術を生産手段として活用し得る、個人としての知識労働者である。巨大組織に独占されたアジアはさらに停滞した状態にあつた。しかし、そのようななかにあって、ほぼ唯一の例外として日本がある。本書では、生折に触れて日本文化の独自性が効果的に強調される。当時の文献を使い、情報拠点であつた長崎出島等を分析することによって、極東の島国が西洋文明を受け入れ、さらには西洋に文化を輸出する状況が描かれる。日本が近代以降、すぐれた経済発展モデルを描き得た素地も新知識受容への姿勢にあつたというわけだ。

三つ目は、「知識」という語を持つ本来的な意味内容に深い示唆を与える点にある。近代以降、次第に官僚制が知識権力の工具として記述されているのかもしれない。

## 『ボブ・ディラン自伝』

ボブ・ディラン著/菅野ハッケル訳 ソフトバンクパブリッシング 定価1,890円

「すごいことだよ、フォーラーがやっていることは。深い感情をことばにするのはむづかしい。『資本論』を書くほうが簡単だ」(本書より)。いつの時代も、芸術は思潮を先どりしてきた。政治や経済理論の体系化がなされるはるか以前に、興隆をきわめる民心のありかを的確に把握してきた。近年では、文学ばかりではない。音楽、特にロックが時代の水先案内役を担つてきた。

六〇年代——。この響きに熱く胸焦がす人々は多い。ちなみに私は七二年の生まれながら、同時代を過ごしていないのに、不思議なノスタルジアを感じてしまう。独自の若者文化、荒廃した政治、カウンター・カルチャーとヒッピーの群れ。戦後の断絶を六〇年代に求める論者は少なくない。六〇年代を一つのシ



ボブ・ディラン自伝

伝説が終わり、真実が始まる  
ついに上げられた開拓のガールを刻む  
全音楽ファン待望の自伝第1弾!  
豪華版

ステムの終焉ととらえる見方は近年にいたつていつそう強まっているように思われる。アメリカでは、六〇年代に関するものだけで実際に多くの著作が刊行されている。音楽ではジャニス・ジョプリン、ジヨーン・バエズ、ジミ・ヘンドリックス、リッチー・ヘイヴンズなどの顔ぶれだ。彼らの存在は、個々の人生のみならず、世界をも変えた。このときはじめて音楽は新時代の行方を示す哲学になつた。むろん、この時代を象徴するロック詩人がボブ・ディランであった。

六〇年代以降に力を伸長させた思想の特徴として、独自の価値観がある。

一九世紀にロシアの文豪ドストエフスキイは、「地下生活者の手記」のなかで、近代合理主義の終わりを予言した。その時代を過ぎていいないのに、不思議なノスタルジアを感じてしまう。独自の若者文化、荒廃した政治、カウンター・カルチャーとヒッピーの群れ。戦後の断絶を六〇年代に求める論者は少なくない。六〇年代を一つのシ

後、ロシア革命、第二次世界大戦を経て、彼の予言通り、世界はこれまで見たことのない価値意識の出現を見た。これが一般に脱近代(ポスト・モダン)といいう今もつて曖昧な名称しかない意識現象であつた。

ボブ・ディランはいう。

「わたしと同じ時期に生まれた人間はみな、ふたつの世界に属している」。

この発言は奇しくも彼の生きた時代状況を的確に捉えている。ようと思われる。まさに戦争を経て、六〇年代とは合理的計画主義と自由主義との拮抗を象徴する時代であった。そして、今われわれを取り巻く現実も、六〇年代という広大無辺の海に環流する伏流水のように見える。

そして、二つの時代を生きることによる苦悩や葛藤のみならず、新たな希望の種子をも象徴する音楽が現れる。これがロックである。そのなかでディランは時代の寵兒という呼び名がふさわしい存在となる。六〇年代の不安な空気のなかで鮮烈なデビューケースを飾り、そしていつしか神格化されていった。

しかし、彼の作品やテーマは決して万人受けするものではなかつた。彼自身いう。

「わたしが代弁するといわれる世代について、わたしはよく知らないし共感もあまりない」。誰でも、「風に吹かれて」や『よくよくするなよ』を聴いたことがあるだろう。反戦やプロテストといったイメージが強い反面、その実像は恬淡として、それでいて現実の深奥をえぐる。本書の書き方も、必ずしもロック・ファンに媚びた「わかりやすい」構成にはなつていな。むしろ、彼の歌のように、煙しながら読者を翻弄する。フレーズをぶつたぎるようなどみ声や、超然と軋むハープの音色が、目で文字を追いながら聞くようだ。もはや意味の世界ではない。感覚の世界だ。ビートルズ、ストーンズ、ディランなどロックの金字塔はすでに音楽史の重要な一角を占めている。もはやベートーベンやバッハと同じ舞台にいる。そのとき、自伝ほど資料として貴重なものはない。今後出版予定という続編も楽しみだ。

森里陽一

社会生態学研究者

## 『産廃ビジネスの経営学』

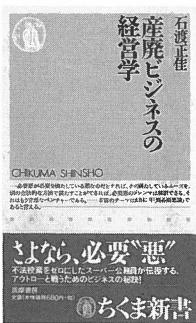
石渡正佳 著 ちくま新書 714円

経済学者のF・ハイスクがおもしろい考察を行っている。「なぜ無能で下品な人物が組織のトップに立つ傾向があるのか」についてのものである。

人々を支配する欲望とは必ずしも高尚なものばかりではない。この当たり前の現実からハイエクは議論をはじめた。反対に底流を渦巻く下賤な欲望こそが組織の絆帶として機能する。結果として最大公約数的な欲望を体現した人物がトップとして承認される。

世の中には下品な欲望による組織と高尚な欲望による組織が存在するの事実であろう。だが、厄介なのは高尚な仮面をかぶった下品な組織があるかと思えば、その逆もあることだ。そして、問題なのは前者である。

現代日本の産廃問題の惨状を知らない人はいな



い。筆者は現役の公務員であり、現場で不法投棄と戦い大きな成果を挙げてきた。敵の多くは有名なアウトローの世界であり、長年この問題はタブーとされてきた。

だが、立脚点はヒロイズムではない。常に現実からスタートして実践的に、しかも淡々と一定の解を導き出す。本書の端々に表れる公を担うものとしての強烈な意識である。いわゆる「環境問題」への関心ですら背後に隠れてしまふほどに、現実を刺し通す目線は鋭く、そして深い。

ゆえに不用意な理想論を用いない。闇の組織をネットワークで承認される。

世の中には下品な欲望による組織と高尚な欲望による組織が存在するのも事実であろう。だが、厄介なのは高尚な仮面をかぶった下品な組織があるかと思えば、その逆もあることだ。そして、問題なのは前者である。

望ましくない現実を「悪」として目を背けるのは、目をつむれば問題が消えたと錯覚するよななものだ。理想論を振りかざり、長年この問題はタブーとされたままである。

逆説的だが、今ある現実からはじめ、漸進的に確実な進歩を促す本書の姿勢は、健全な保守思想を表現しているようすら思われる。

それにしても思うのは、産廃をめぐる現状は日本の無責任体質の縮図ではないかということだ。

かつて政治学者の丸山真男が見抜いた「無責任の体系」が今おび情報共有で表の世界に引きずり出し、社会的に明確な役割を与えようとする。いかにも生産的だ。

それにしても思うのは、産廃をめぐる現状は日本の無責任体質の縮図ではないかということだ。

かつて政治学者の丸山真男が見抜いた「無責任の体系」が今おび情報共有で表の世界に引きずり出し、社会的に明確な役割を与えようとする。いかにも生産的だ。

希望とはものごとの終わりとはじまりに位置する、と述べた現代作家がいる。見たくない現実を凝視して、運動法則を見定め、格闘する。そのなかで理想に近似的な解を見出していく。希望を現実に根拠あらしめるための方法である。

本書がこの「希望」という言葉で締めくくられるのも、われわれが巨大なシステムの終わりから未来を眺めるべき地点に立つたことを暗示するのかもしれない。

構造を、産廃問題を材料に深く考えさせてくれる。

数ある処方箋のなかでも、特にベンチャーに関する箇所が秀逸である。人間が自覚的に社会に働きかけ、今ある資源を意味あるものとする手法が明快に描かれる。換言すれば、「無責任の体系」を「責任の体系」に一八〇度転換させる方法論である。そして、これは絶望の山から希望の石を切り出す方法論である。

希望とはものごとの終わりとはじまりに位置する、と述べた現代作家がいる。見たくない現実を凝視して、運動法則を見定め、格闘する。そのなかで理想に近似的な解を見出していく。希望を現実に根拠あらしめるための方法である。

本書がこの「希望」という言葉で締めくくられるのも、われわれが巨大なシステムの終わりから未来を眺めるべき地点に立つたことを暗示するのかもしれない。

社会生態学研究者

森里陽一



## 『現代企業の組織デザイン』

J・ロバーツ／谷口和弘訳 NTT出版 定価3,360円

アメリカのあるビジネススクールでの話。

ある学生が入学してきた。学生といつても年輩で、しかも社長だった。経営者として華々しい成功を収めていた。

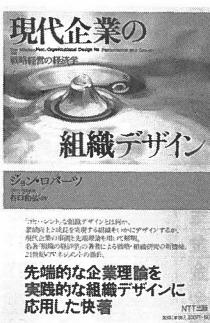
指導教官は、不思議に思った。なぜ自分のビジネスで十分成功しているのに、わざわざ経営学などを学びに来るのだろうか。と。そこで、彼に聞いてみた。

「あなたは企業家として十分成功している。何を学びにやってきたのですか？」

彼は答えた。「私はなぜ自分が成功できたのかわからない。その原因を知りたくてここに来たのです。」

本原書の裏表紙には次のような推薦文が印刷されている。

「企業経営者に読んでほしい著作だ。実践者への貴重な教訓に富む。」



まぎれもなく経済理論の本なのだが、これまで企業の経営者にとって必読の経済学書というものがあつたのか思い浮かばない。シンペーターは数少ない例外かもしれない。しかし通常、経営者は理論を知らないことも経営ができる。合理的な説明がなくとも、実践活動を営むことはできる。

本書の中心命題は組織デザインという身近な制度に関わるものである。だが、アプローチにはきわめて斬新なものがある。例えば、制度学派のノーベル賞学者D・ノースは「制度とはリスクを低減させるために日常を構造化させること」と述べた。つまり、慣習や制度といったものは長期に継続することが暗黙の前提とされていた。

ページをめくつてすぐに気づくことがある。経済理論書特有の数式、統計表の類がほとんど見られないことだ。むしろ戦略やデザイン、ビジョン、リードーシップといった通常なら経営学領域の言葉が随所に飛び交う。これらの概念を駆使して、企業業績と組織デザインやパターンの全体的な把握が目指される。

さうにこれらを説得的なものとするために、歴史的事象の比較により構造が鮮やかに描出さ

一方、本書で際立つのは、変化を前提とした組織デザインにある。企業とは変化に反応する。企業行動が變化とともに、変化を生み出す存在であることがきちんと体系に織り込まれている。

考えてみれば、企業という存在自体が経済学、特に理論では、驚くほどに関心が払われなかつた。むしろそれは経営学や社会学といった隣接分野での検討事項とされた。その意味で、この本の最大の強みは、領域の垣根を意識的かつ大胆に踏み越えたところにある。

そして、変化の経済学は同時に経済学自体の変化をも促す。精密科学として以上に、現実を説明し、未来へのビジョンを描く道具に変化しつつある。本書はこの意味で成功していると思う。

少なくとも、経営者の必読文献のリストに名を連ねる経済学書が現れたこと一つとっても、世の中のみならず学問も変わったことを痛感する。

社会生態学研究者  
森里陽一